は概して波形を呈し、少くともこの期間は棲息密度の準位は殆んど一定を保ち低減せず、依然異常増殖能が続いている事を反映している。(高知女子大・動物)

大阪市内棲息鼠の研究: 田中英雄・青木修 Tanaka, H. & Aoki, O.: Medical zoological studies on the rats in Osaka City

大阪市内棲息鼠の分布、季節的推移消長、性比、外部寄生虫並びに保菌状況に関しては1950年10月より1951年9月迄と1955年12月より1956年3月迄の様相について報告したが更に1956年12月より1957年2月迄連日捕鼠を行いその結果大阪市内における鼠族の分布、性比、棲息状況、外部寄生虫等の相関々係を統合的に観察し、次の如き結果を得た。1) 鼠族 総数384 頭について調査した結果 *R. rattus* は159 頭で44%, *R. norvegicus* は225 頭で56%であった。大阪市内の鼠族の組成は *R. rattus* と *R. norvegicus* が主で *R. norvegicus* は *R. rattus* との比率が第1報第2報及び続報のと比較するに約35%:65%であったものが、今回の比率は40%:60%と殆んど逆の様相を呈している。又市の中心部東区、南区、阿部野区にも *R. norvegicus* が増加した事、西淀川臨港地帯にも更に増加している事など注目し価値する。性比については全体として♀の方が多数であった。2) 外部寄生虫 調査鼠数303 頭で附着数は90匹であった。*R. rattus* の方は49匹で両種共 *Leptopsylla musculi* が多数寄生しており、1956年の調査では *Ceratopsyllus fasciatus* が最も多く寄生していた点においてその様相を異にしている。*R. norvegicus* には1956年の調査と同様 *Laelaptinae* が多数寄生していた。*Xenopsylla cheopis* 砂蚤寄生鼠も発見出来なかった。(大阪市大・医・医動物)

野生鼠の仔の飼育: 熊沢誠義・織田栄子・原田忠良 Ku-masawa, N., Oda, E. & Harada, T.: Rearing of young of wild rats and mice

鼠の害は多いのにその駆除は容易でない。鼠の生態を研究して自由に飼育繁殖させることが出来れば駆除の効果もあげられるわけである。防鼠対策の基礎として野生鼠の仔の飼育を度々試みた。野生鼠の仔を捕えた場合に、離乳期前後のものであれば、牛乳に浸したパンを与えるだけで問題なく育つけれども、未だ哺乳中の、固形物を食べない幼令のものを人工哺育することは非常な手数を要する上に小型の種類では非常に困難であつて、従

来度々試みたが失敗が多い。適当な乳母に哺育させる場合、親の尿を仔の体に塗つてやつても自分の仔以外はかみ殺したり、巢の外に放葉したり自分の仔を他に運んでしまつて失敗する場合が多い。乳母を暫時取出して、仔を巢の中に混在させて体臭を混合させても成功しない場合がある。ヨーロッパハツカネズミ *Mus musculus* を乳母として、牛乳を使つて簡単に乳母に抱かせ得ることを知つた。先ず乳母に牛乳を与え、次に抱かせるべき野生鼠の仔に体温位に暖めた牛乳をつけて巢の中に入れてやると、仔の体をなめ、そのまま抱いて哺乳する様になる。しかし仔が空腹其他で元気がない時は仔にも予め牛乳を飲ませるとよい。乳母の元来の仔が抱かせる鼠の仔より小さいことが必要である。若し大きければ抱かせようとする仔が圧倒されてしまう。又乳母の仔の数も2疋位に間引する。以上の方式によつてカヤネズミ *Micro-mys japonicus*, アカネズミ *Apodemus speciosus* の開眼していない仔を育てることに成功した。親仔共に捕えた場合、ハタネズミ *Microtus montebelli* は単に同居させるだけで育つがアカネズミにも同様な例があつた。*Rattus* や *Mus* は同居させると普通は自分の仔を放棄或はかみ殺すが、クマネズミ *Rattus rattus* の生後4~5日の仔を牛乳法でその親に育てさせることを得た。

(三共高峰研)

九州産野鼠類の疫学的調査: 加茂甫・(故)池田温・西村謙一・小林讓・矢野隆・藤本知之 Kamo, H., the late Ikeda, A., Nishimura, K., Kobayashi, Y., Yano, T. & Fujimoto, T.: The ecological survey of the field rats in Kyushu

1955年5月から1956年4月の間に、熊本県を中心に一部鹿児島県、宮崎県の各地で野鼠類を捕え、保有病毒、外部寄生虫などを調査した成績を報告する。1. 病毒の分離: 捕えた野鼠類(アカネズミ、ヒメネズミ、ヒミズモグラ)の脾及び腎を、地区別に1~9頭宛プールし、それぞれマウス及びモルモットに接種し、3代以上継代観察して病毒分離を試みた結果、熊本県水俣から2系統、袋から2系統、鹿児島県出水から1系統、計5系統のリケッチアを分離できた。これらは、マウスの病状、病変、腹膜塗抹標本上の形態的所見、また交叉免疫試験などの成績から、恙虫病リケッチアに属するものと考えられる。そのほか、熊本県湯浦、二見、水俣各地方及び鹿児島県阿久根から、それぞれ1系統計4系統の *Encephalitozoon* が分離され、鹿児島県出水から1系統 *Leptospira autumnalis* が分離された。ここで注目されるこ